

第2回 早過ぎた翻訳

明治16年(1883)の *The Japan Punch* にワイルドは紹介されたが、その後 どういう経緯をたどったのかははっきりしないが、早くも明治24年(1891)には増田藤之助(1865-1942)によって『社会主義下の人間の魂』(*The Soul of Man under Socialism*)が「美術の個人主義(ラスカル、ワイルド氏論文抄譯)」(『自由』5月28日)として発表された。これまでの受容史研究でもワイルド生存中に紹介された唯一の作品と言われている。

(1) 『社会主義下の人間の魂』

『社会主義下の人間の魂』は、明治24年(1891)2月に『フォートナイトリ・レビュー』(*Fortnightly Review* 49)誌上に発表された。同年1月には『パデュア侯爵夫人』(*The Duchess of Padua*)が『ギドー・フェルランテ』(*Guido Ferranti*)のタイトルでニューヨークで3週間の上演、4月に『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*)の出版、5月に「虚言の衰退」(*The Decay of Lying*)、「ペン、ペンシル、毒薬」(*Pen, Pencil and Poison*)、「芸術家としての批評家」(*The Critic as Artist*)を収録した『意向集』(*The Intentions*)の出版。7月に『アーサー・サヴィル卿の犯罪』(*Lord Arthur Savile's Crime—A Study of Duty*)、11月には童話集『柘榴の家』(*The House of Pomegranates*)が出版された。明治24年(1891)はワイルドが自身の芸術論を発表した年ということになる。

The chief advantage that would result from the establishment of Socialism is, undoubtedly, the fact that Socialism would relieve us from that sordid necessity of living for others which, in the present condition of things, presses so hardly upon almost everybody. In fact, scarcely any one at all escapes.⁽¹⁾

上記の英文で始まる『社会主義下の人間の魂』は、“The new Individualism is the new Hellenism.”⁽²⁾で結ばれている。社会主義の確立から生じる利点から、新しい個人主義とは、“What it aims at is an Individualism expressing itself through joy”⁽³⁾と述べている。ワイルドは社会主義を論じながら、実は個人主義を論じていたことになる。

Socialism itself will be of value simply because it will lead to Individualism.⁽⁴⁾

ワイルドは単に社会主義や個人の芸術の根幹をナルシズムを通して、個人と社会の関連を意識し、自己を完成させる新しい個人主義を理想郷として論じたのである。ワイルドが問題にしたのは“soul”の部分である。自己表現は、すなわち、芸術であるとワイルドは述べている。

Art is Individualism, and Individualism is a disturbing and dis-integrating force. Therein lies its immense value. ⁽⁵⁾

題名にこそ「社会主義」という表現はされているが、ワイルドは結局、芸術論を展開させていたのである。

(2) 「美術の個人主義」

明治 24 年 (1891) に増田藤之助によって『社会主義下の人間の魂』の一部が「美術の個人主義 (ラスカル、ワイルド氏論文抄譯)」(『自由』5 月 28 日) として紹介された。しかし、「美術の個人主義」は原文の中程をほんのわずかに紹介したに過ぎない。『社会主義下の人間の魂』では社会的不平等の根源を私有財産制に求め、これを廃止ないし制限し、財産を社会的所有へと考える内容もあるが、増田は社会主義の描写ではなく、個人主義や芸術論の部分を取り上げたのである。政治的意図から「個人主義」に注目していたのであろうが、ワイルドの芸術観をとらえることになったのは見事であろう。当時の訳語の問題を考慮しても、その内容は十分に伝わるものと判断できる。この部分をワイルドの原文と翻訳を並列して紹介しておきたい。翻訳を増田藤之助訳 (明治 24 年)、近衛文麿訳 (大正 3 年)、本間久雄訳 (大正 9 年)、西村孝次訳 (昭和 56 年) と並列して紹介してみよう。

A work of art is the unique result of a unique temperament. Its beauty comes from the fact that the author is what he is. It has nothing to do with the fact that other people what they want. ⁽⁶⁾

技術の作は特殊の性情の特殊の結果なり。其の美は作者が独自一己の面目を發揮するより来るも衆人が如何なる作を欲し如何なる物を望むかは回より其の關する所にあらず。(増田訳)⁽⁷⁾

芸術的作品は無類独特の氣質より生じたる無類独特の結果である。芸術的

作品の美とは作者が自己ありのままに偽りなく表記したる所にある。他の要求に応じてなさたる表記に美は存在しない。(近衛訳)⁽⁸⁾

芸術の作品は唯一独自の唯一独自の産物である。その美は、その作家がどういふ人であるかといふその事実から来る。それは他の人人が何を要求するかといふ事実とは無関係である。(本間訳)⁽⁹⁾

芸術作品は無二の気質の無二の成果である。その美しさは作者が作者その人であるという事実由来する。それは他人は他人の求めるものを求めるという事実とはなんのかかわりもない。(西村訳)⁽¹⁰⁾

増田は個人主義と芸術観を論じている部分を見事に訳出している。更に芸術と個人主義については次ぎの所を取り上げている。

Art is the most intense mood of Individualism that the world has known. I am inclined to say that it is the only real mode of Individualism that the world has known.⁽¹¹⁾

増田はこの部分を次ぎのように訳している。

蓋し技術は個人主義中の最も烈しき制なり、余は寧ろ眞個の個人主義の制は唯り技術なるのみを謂わんと欲す。⁽¹²⁾

さらに、“Art is Individualism.”⁽¹³⁾ (「技術は個人主義なり」⁽¹⁴⁾)も紹介されているのだ。増田訳では‘art’を「技術」として訳している。‘art’を現在と同じ意味で「芸術」と訳するのは、西欧からの文化を訳すのと同様で、この頃はまだ定着していなかったようだ。⁽¹⁵⁾ 参考までに明治 20 年代の英和辞典をみると、明治 21 年 (1888) のイーストレーキ・棚橋一郎共訳『ウェブスター氏新刊大辞書和訳辞彙』(三省堂)には‘art’の見出し語さえない。明治 35 年 (1902) の神田乃武等訳『新訳英和辞典』(三省堂)には‘art’の見出し語はあるが「芸、技術」と訳されており、「Fine Arts 美術」も記述もあるが、「芸術」の表記は見当たらない。明治 43 年 (1910) になると上野陽一・長崎英造・太田英次郎編『学生英和辞典』(博報堂)には「芸術」の訳語が当てられている。文芸論を扱った文章を見てみると、明治 39 年 (1906) にはトルストイ / 有馬祐政訳『芸術論』(博文館)、明治 40 年 (1907) の島村抱月「英国の尚美主義」

(『明星』末歳第9号)、同年の厨川白村「近英詩人の時勢に対する関係を論ず」(『帝国文学』第13巻第10号～第12号)、明治42年(1909)の本間久雄「人生も自然も芸術の模倣也」(『文章世界』第5巻第4号)の文中には「芸術」の表現が見られる。明治40年前後には「芸術」という言葉が定着していたことがわかる。島村抱月(1871-1918)や本間久雄(1886-1981)の文章には現代と全く同じ意味で「芸術」という言葉が用いられているのだ。増田は、本文で‘art’を「技術」と訳していながら、表題では「美術の個人主義」としている。本文で‘art’を「技術」と訳し、その後に「茲に技術とは廣く詩歌小説類をも含むもの」⁽¹⁶⁾と、カッコ付きで注釈を加えているのは興味深い。ワイルドの原文にはこのような文はなく、増田自身が書き加えた部分である。増田は‘art’の意味を「芸術」という訳語を用いてはいないが、‘art’の概念を理解していたと考えられる。

(3) 増田藤之助

「美術の個人主義」を抄訳した増田藤之助は、慶應元年(1865)に伊勢の津で生れた。明治11年(1878)11月に三重県師範学校附属小学校卒業後、ほぼ独学で英語を勉強し、10代後半の明治14年(1881)9月に伊勢新聞に入社した。当時は自由党の支持者で、激越の筆屢で伊勢新聞の発行停止を招くこと数回、特に明治15年(1882)の福島事件裁判終了の時には切なる同情を表したため、数週間の発行停止にもあっている。⁽¹⁷⁾明治17年(1884)5月に群馬事件、9月に加波山事件、11月に秩父事件などまさに自由民権運動がピークを迎えていた頃である。明治20年1月には東京英語学校で英語・漢文を学び、明治23年(1890)3月には『中外電報』の「日本の一大政治家」という懸賞論文に応募し、見事当選している。同年、国民英学会で教鞭を執る傍ら、『自由』の客員として論説などを発表していた。

「美術の個人主義」が発表されたのは明治24年(1891)5月28日のことであった。増田の生涯を見てみると、明治23年(1890)に国民英学会で教鞭を執るようになると、教育の道に除々に入るようになり、大きな転換期を迎えることになった。明治25年(1892)3月には日本で本格的な語学雑誌『日本英学新誌』を創刊し、明治27年(1894)2月には東京専門学校の文科で教鞭を執ることになった。東京専門学校・早稲田大学教師としての増田は、語学教師として全身全霊を尽くしていた。「坪内博士の純文学方面の指導に対し、文学の語学的表現を最も正確に適切に巧妙に譯出し、解説し評釈して、坪内博士の指導と相俟つて文学教育の完成を齎された」⁽¹⁸⁾とあるように、「文学の坪内、語学の増田」として早稲田大学での教育に携わっていた。さらに、明治38年

(1905)には『英語青年』の編集顧問にもなっている。

(4) 自由民権運動と『自由』

「美術の個人主義」が『自由』に掲載されたのは明治24年(1891)のことで、日本は政治的に大きく揺れていた時期である。板垣退助(1837-1919)は明治7年(1874)に後藤象二郎(1838-1897)等と共に愛国公党を組織し、民撰議院設立建白書を提出。その後、明治14年(1881)に自由党を結成、翌年6月に自由党の日刊機関紙として創刊されたのが『自由新聞』である。板垣退助を社長に、馬場辰猪(1850-1888)、中江兆民(1847-1901)、田口卯吉(1855-1905)、末広重恭(鉄腸)(1849-1896)等一流の民撰論者が社説を担当した。嶋本仲道(1833-1892)、植木枝盛(1857-1892)、栗原亮一(?-1911)等が在社していた。明治17年(1884)10月に自由党が解体したため、明治18年(1885)3月に廃刊となった。その後、明治23年(1890)10月に再興されたものの、翌年3月には再び廃刊となった。明治22年(1889)に大日本帝国憲法公布、明治23年(1890)には第1回帝国議会が開会され、同年10月に新聞は再開されたものの、翌年3月には再び廃刊となったが、四月に『自由』として発刊した。『自由』は『自由新聞』の後身で、社主は星亨(1850-1901)、主筆は栗原亮一で、増田藤之助はこの助手として海外の新しい思潮を紹介していたようだ。板垣退助は明治15年(1882)に、星亨は明治34年(1901)に遊説中に凶変にあっている。自由民権を訴え、言論の自由を実践した人物としても歴史に名を留めている。こうした板垣退助の配下の栗原亮一の助手であった20代半ばの増田藤之助が、ワイルドの『社会主義下の人間の魂』から「社会主義」を論じる部分ではなく、「芸術論」・「個人主義」の部分を紹介したのである。

(5) 日本の社会主義

「美術の個人主義」を抄訳した増田藤之助は早くから政治的関心を持っていたが、何故、『社会主義下の人間の魂』を取り上げたのかは、推測の域を出ることができない。

自由民権運動は日本の民主主義の原点を刻んだ運動であるが、この民権運動が同時に社会主義と結びついたのである。⁽¹⁹⁾スローガンとしては国会開設、憲法制度、地租軽減、地方自治、不平等条約撤廃という5大要求を掲げて、民主主義的な立憲制国家体制を目指していたが、その根本思想は「自由」と「平等」である。ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)の自由・政体論、ハーバード・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の権利論、ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)の社会契約論な

どは自由民権思想のよりどころであった。ミルの『自由論』は明治5年(1872)に中村正直訳『自由之理』、スペンサーの『社会静学』は明治14年~16年(1881-1883)に松島剛訳『社会平権論』、ルソーの『社会契約論』は明治15年(1882)に中江兆民訳『民約訳解』として紹介されている。

社会主義という言葉は、文政10年(1827)にイギリスのオーエン派の出版物に初めて“Socialism”として登場したと言われている。社会主義の理論的基礎を据えるマルクスの『資本論』(第1巻)が公刊されたのは慶應3年(1867)のことである。明治14年(1881)にはキリスト教雑誌の『六合雑誌』(第7号)では小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ス」の中で、マルクス主義のまとまった紹介が行われている。「社会党」との表記になっているが、英語目次では‘The Cause of Modern Socialism. By the Editor.’とあるように、日本語としては「社会主義」という表記は出現していないが、英語目次より‘Socialism’を訳したことがわかる。その文中には「現今国会請願者中間々過激ノ主義ヲ有スルモノアル」⁽²⁰⁾とあるように、その内容では自由民権運動を意識していることは注目に値する。自由民権運動から、明治24年(1891)12月の『国民之友』(第139巻)には徳富蘇峰「平民主義の第一著の勝利」や明治26年(1893)7月の『国民之友』(第197巻)には酒井雄三郎「『社会問題』と『近世文明』との關係に就きて」などが発表されている。日本で本格的に社会主義を説いた出版物としては明治25年(1892)の斯波貞吉『国家的社会論』がある。その後、村井知至(1861-1944)を会長に、片山潜(1859-1933)、幸徳秋水(1871-1911)らによって明治31年(1898)に社会主義研究会が設立、村井知至は明治32年(1899)に『社会主義』、幸徳秋水は明治36年(1903)に『社会主義神髓』を発表するなど明治30年代に入ってからのことであるが、最も象徴的な出来事は、明治34年(1901)5月18日に日本最初の社会主義政党を安倍磯雄(1865-1949)、木下尚江(1869-1937)、西川光二郎(1879-1940)、片山潜、幸徳秋水、河上清(1873-1949)が社会民主党として結成するが、5月20日には当局によって禁止されたことである。主唱者6名のうち5名がキリスト教徒であることも付け加えておきたい。ここでもう一つ取り上げておきたいのは、明治40年(1907)3月に種村宗八編/増田藤之助・佐久間信栄講述『英語講話』(早稲田大学出版部)である。ワイルドへの言及はないが、附録に村井知至「英語研究の心得」が収録されている。村井知至は明治31年(1898)に社会主義研究会の会長となった人物である。さらに村井は後年、東京外国語大学で教育者としての道を歩むことになる。

(6) 「社会主義下の人間の魂」の受容状況

明治 24 年 (1891) 5 月に増田藤之助によって部分訳として紹介された「社会主義下の人間の魂」は、その後、なかなか登場しない。明治 42 年 (1909) 12 月に本間久雄は「現実を離れんとする文藝」(『早稲田文学』第 49 号)の中で、ワイルドの作品中では『獄中記』が最も価値があると述べているが、『社会主義下に於ける人間の靈魂』(The Soul of Man under Socialism)及び「批評の眞職能」(The True of Function of Criticism)の 2 編に注目したとの記述がある。⁽²¹⁾この評論の中で社会主義とは人間社会を改良することであり、人間の改良は個人主義によるものであり、以後、個人主義の見地に立って芸術論が展開されているのである。本間は純粋に芸術論の立場からワイルドのこの評論を扱っているのである。その後、明治 43 年 (1910) 12 月に『国民経済雑誌』(第九巻第六号)の「最近ノ経済学界」で

Wilde, O. The soul of man under socialism. Authorized. ed.
Boston. 1910. 60c. ⁽²²⁾

の記述がある。いわゆる海外書籍の紹介である。明治以後は、大正 3 年 (1914) 2 月には大杉栄(1887-1981)が中心となった『近代思想』(第 2 巻第 5 号、近代思想社)に荒畑寒村が「ワイルドの哲学」と題して「社会主義下の人間の魂」を抄訳して掲載した。

個人主義は、吾々が社会主義を通じて到達せんとするものである。⁽²³⁾

この一文はワイルドの原文では

Socialism itself will be of value simply because it will lead to
Individualism. ⁽²⁴⁾

の部分である。荒畑寒村は原文の because 以下だけを紹介したことになる。大正 3 年 (1914) 5 月には新田佐逸が「ワイルドの The Soul of Man にあらわれたる思想」(『新潮』第 20 巻第 5 号、新潮社)を発表している。新田は大正 8 年 (1919) 12 月に『現代社会生活の批判』(大同館書店)を出版している。ワイルドへの言及はないものの、「第一章 国家と社会主義運動」とあるように、社会主義を論じている。そして、同月に『新思潮』(第 1 巻 5 号、新思潮社)に近衛文麿(1891-1945)が『社会主義下の人間の魂』を翻訳して発表したのである。近衛文麿の名前で文章を出し、活字化された最初のものと言われていることも

付け加えておきたい。小野次郎(1929-1982)によれば、近衛文麿の翻訳には次のような逸話もある。

『社会主義下の人間の魂』だが、かつては社会主義、あるいは無政府主義文献として、一応必ず挙げられたものである。大正3年というから、もう六十年近くも昔の話になるが、後年の首相、当時まだ京大生だった公爵家の御曹司近衛文麿が一読して感激、訳出して例の同人雑誌「新思潮」にのせたまではよいが、見事発禁をくらったというのも、このワイルドの一篇だったのだ。(25)

岡義武(1902-1990)によれば、さらに気になる指摘もある。

近衛の自決後に秀麿は追想して、自分は兄から「社会主義談議」をよくきかされた。(中略)文麿のころ「社会主義談議」は恐らくはただその時のむら気によるものであろう。そして、その同じ気持ちの心の中に育まれた「社会に対する反抗心」つらなるものであろう。そして、その同じ気持ちが後に大学時代に彼を河上肇の許に出入させる一因にもなったのであろう。近衛はまた、京大在学中にオスカ・ワイルド(Oscar Wilde)の「社会主義の下における人間の魂」(The Soul of Man under Socialism)を訳し、それは第三次「新思潮」の大正三年五、六月号に連載されたが、この訳文も一因となって同誌五月号は発禁処分に付された。(26)

細川隆元監修/矢部貞治『近衛文麿』では、近衛の京大時代では西園寺公望(1849-1940)に会ったこととオスカー・ワイルドの『社会主義下の人間の魂』を訳して発禁になったことを取り上げている。(27)皇室と特別の関係にある最高の貴族出身者が社会主義の思想に惹かれたということは近衛の運命的な生涯を象徴しているとも言える。近衛のワイルドへの関心は一過性のものではなかったようだ。それは、近衛が自決する直前に読んでいたのが『獄中記』であったと言う事実もわかっているだけに、近衛がただ単にこの時期に『社会主義下の人間の魂』を翻訳したと言う以上に、近衛の精神生活にも多大な影響を与えていたということも十分に考えられる。

『社会主義下の人間の魂』が翻訳として大きく取り上げられたのは、大正9年(1920)6月の本間久雄訳『社会主義と人間の靈魂』(新潮社)、翌月には矢口達監修『ワイルド全集』(第五巻、天佑社)の中に収録されたのである。

こうした一連の流れを見ると、大正9年(1920)までは政治的な配慮があっ

たと考えられる。荒畑寒村は幸徳秋水や堺利彦(1870-1933)と同様に社会主義者であり、大正9年(1920)に日本社会主義同盟、大正11年(1922)に日本共産党の創立に参加している。荒畑、新田、近衛の紹介や翻訳は大正3年(1914)のことである。この大正3年(1914)は第一次世界大戦が始まった年である。大正7年(1918)にはロシア革命も起きていることから、思想的にもなにやら難しい時期であったと言える。その後、大きく取り上げられたのは、昭和24年(1949)8月の木村亀二「文学と社会的背景——オスカー・ワイルドの社会主義」(『表現』第2巻第7号)である。実際に『社会主義下の人間の魂』を扱った箇所は後半だけであるが、核心をついている。

ワイルドの社会主義は、モーリスやショーのそれとは根本的に趣きを異にしていたのである。又、ワイルドの社会主義は彼の耽美主義と深く結びつき、或る意味では耽美主義の結論であるともいい得る。何となれば、芸術と美をもって最高の表現であり価値であるとするワイルドは、芸術的創造の基礎として個性・人格の価値を最も高いものとするのであって、社会主義は、人間の個性を生かすが故に価値があるのであり、それが到達せんとするのは、個人主義・人格主義の意味におおける個人主義であるからだ。(三十一)

こうした論文も登場するが、戦後になり、日本が新しい政治体制が落ち着こうとしていた時期であることを考えると、明治から大正の時期の受容時期と同じように政治的な影響を受けていたと思われる。昭和43年(1968)7月にはしもとよしはる訳『社会主義の下での人間の魂』(バルカン社)、昭和56年(1981)2月の西村孝次訳『オスカー・ワイルド全集』(第4巻、青土社)の中に『社会主義の下での人間の魂』として収載されたのである。その後新しい翻訳は出ていないものの、全集等に収載された。

『社会主義下の人間の魂』の受容状況ということから大正・昭和時代にも踏み込んだが、こうした受容史を見ても、増田藤之助が芸術論として『社会主義下の人間の魂』を紹介していたことは大きな意味があるのだ。

参考資料

本間久雄「オスカア・ワイルドと日本」(『文学』第2巻第1号、岩波書店、1934年1月)

齋藤繁子「増田藤之助」(『学苑』第10号、昭和女子大学内光葉会、1951年10月)

増田綱「増田藤之助」(『英文学』第4号、早稲田大学英文学会、1952年10月)

- 平井博「日本における Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第2分冊、第17号、福島大学学芸学部、1965年10月)
- 井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期(第1部)」(『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月)
- 「増田藤之助」(『近代文学研究叢書』第48号、昭和女子大学近代文学研究所、1979年1月)
- 平井博『オスカー・ワイルド考』(松柏社、1980年7月)
- 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月
- 佐々木隆「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、武蔵野短期大学、1999年6月)

注

- (1) *The Complete Works of Oscar Wilde* (London: Collins, 1990), p.1079.
- (2) Ibid., p.1104.
- (3) Ibid., p.1103.
- (4) Ibid., p.1080.
- (5) *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.1091.
- (6) *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.1090.
- (7) 増田藤之助「美術の個人主義——ラスカル・ワイルドの論文抄譯」(『自由』1891年5月28日)
- (8) 近衛文麿「The Soul of Man Under Socialism¹」(『新思潮』第1巻第4号、新思潮社、1914年5月) p.21.
- (9) 本間久雄訳『社会主義と人間の靈魂』(『ワイルド全集』第五巻、改造社、1920年7月) 452頁。
- (10) 西村孝次訳『社会主義下の人間の魂』(『オスカー・ワイルド全集』、青土社、1981年2月) p.324.
- (11) *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.1090.
- (12) 「美術の個人主義」
- (13) *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.1091.
- (14) 「美術の個人主義」
- (15) 平井博『オスカー・ワイルド考』(松柏社、1980年7月) p.144.
- (16) 「美術の個人主義」
- (17) 増田綱「増田藤之助」(『英文学』第四号、早稲田大学英文学会、1952年10月) p.20.

- (18) Ibid., 30.
- (19) 堺利彦は『平民新聞』(第8号)の「予は如何にして社会主義者となりし乎」の中で「予の社会主義は其根底に於てはやはり自由民権説であり、やはり儒教であると思ふ」と文章を寄せている。
- (20) 小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ス」(『六合雑誌』第7号, 1881年4月) p.112.
- (21) 本間久雄「現実を離れんとする文藝」(『早稲田文学』第49号, 1909年12月) pp.27-30.
- (22) 『国民経済雑誌』(第9巻第6号, 1910年12月, 宝文館) p.176.
- (23) 荒畑寒村「ワイルドの哲学」(『近代思想』第2巻第5号, 1914年2月, 近代思想社) p.1.
- (24) *The Complete Works of Oscar Wilde* (Collins, 1990), p.1080.
- (25) 小野二郎「ワイルドと社会主義下の人間の魂 白熱せる魂と犯罪への共感」(『自由時間』通巻11号, 土曜美術社, 1975年11月) p.24.
- (26) 岡義武『近衛文麿』(岩波書店, 1972年6月) p.8.
- (27) 細川隆元監修 / 矢部貞治『近衛文麿』(日本宰相列伝15, 時事通信社, 1986年2月) pp.13-24.
- (28) 木村亀二「文学と社会的背景——オスカー・ワイルドの社会主義」(『表現』第2巻第7号, 角川書店, 1949年8月) p.50.